



農家がデモ ～補助金と食料自給率～

ドイツでは最近、農家によるデモが新聞を賑わせています。政府が農家への補助金を削減し、ディーゼルの農作業車に税金をかけ、二酸化炭素税の増税を発表したため。全国各地でトラクターに乗って集まり、数週間にわたってデモが続いています。ベルリンには何千台ものトラクターが集まり、政府に反対の声を上げる姿が見られました。

ドイツの食料自給率は2021/22年は、86%でした。農民ひとりあたり139人分の食料生産をしている計算になり、1990年に比べて倍の人数を支えています。自給率はジャガイモ150%、肉121%、牛乳112%のほか、穀物と砂糖も100%を超えていて、ドイツ人の大好きなパン、シュニッツェル（薄いトンカツ）、ポテトフライは自給できています。

北海道より北に位置するドイツでは、取れる野菜の種類は限られており、

野菜の3分の1、果物の5分の1しか自給していません。キャベツは112%ですが、トマトは4%。おなじみのリンゴでさえ48%、さくらんぼは18%で、人件費の安い他国に頼っています。スペインやトルコをはじめ、最近人気のマンゴーやアボガドなど熱帯の果物は東南アジアから入ってきています。

農家のデモを受け、全国紙「ヴェルト」の記者は農家の収入の半分は補助金によるものだとし、補助金制度見直しの必要性を説いています。

手厚い補助金政策のおかげで余剰となった乳製品などがアジアやアフリカに格安で輸出され、現地の農家が価格競争に勝てず農業が育たないとの批判もあります。しかし農家は補助金があるから安く安定して食料供給がされているとし、労働時間の長さを考えると収入は十分ではないと反論。有機農法への支援が少ないことも問題だとしています。



ボリューム満点、ドイツの朝食

トラクターで道路を占拠するデモのせいで幹線道路が封鎖されたりしていますが、ドイツではデモをするのは権利の一つです。

ロシアによるウクライナ侵攻により、欧州の穀倉地帯と呼ばれているウクライナから油や穀物が入らなくなり、ドイツの食料は値上がりしました。食べ物があるのは当たり前だと思っていたけれど、実は生産してくれる人がいるから。自国で食料を自給することがいかに重要であるか、農家のデモは国民に意識の変革を迫っています。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

AKIRA の 成長記録

5ヶ月にわたる長野県での高校生活が終わり、年末ドイツに戻ってきました。ハノーファーでごみの散らかった歩道を見て、明は「ドイツは悲しいね」とぼつり。やる気がなく、文句ばかりいうドイツ人にうんざりしているようで「日本は楽しかった、本当によかった」を連発しています。通っていた公立高校はとてオープンで先生はきさくだし、生徒はほどよく真面目で、よい学校に当たってラッキーでした。

明が日本の高校で感じたのは...

- ・生徒ひとりひとりが何事にも一生懸命に取り組んでいる（ドイツではやる気がないのを隠さない子が多い。体育祭に参加しなかったり、わざと失敗して仲間の足を引っばったり）
- ・発言や討論をほとんどしないので楽。授業がすすい進む
- ・クラス内の結束や担任へのつながりが強い（ドイツは朝礼、終礼がないので、担任と毎日顔を合わさない。ホームルームは週に1時間）
- ・部活など夢中になれるものがある（ドイツに部活はなく、サッカーなど運動は地域のクラブ であるが、文化部にあたるものがない）

明は遜色なく日本語をしゃべれるので、初日に学校で「お手洗いはどこですか」ときいて「俺より日本語が丁寧!」とびっくりされたり、先生から「留学生というより転校生という感じだな」と言われてました。けれどテストは苦戦。

漢字が難しく問題文があまり読めず数学は50点、社会は30点ほど。英語は単語の意味はわかっても、漢字がわからず勘でなんとか80点を取りました。

部活はドイツでやっていたバスケットボールをしたかったけれど、右足首の手術をしたので運動はできず、英語で討論する国際ディベート部に入りました。調べ物が得意な明にはぴったり。毎日のように放課後、わきあいあいと切磋琢磨するのは刺激的だったようです。

担任の先生が毎朝「ドイツ語ミニ講座」を企画してくれ「今日は寒いですね」「寝坊したので学校に遅れました」など明がドイツ語の言い回しを紹介してみんなで復唱し、クラスメートがドイツに親しむきっかけをつくってくれたと感謝。明も注目を浴び、自分にもできることがあると感じたはず。いろんな意味で日本滞在はまたとない経験になり、「7月に2週間また学校に行く」と今から宣言しています。

ドイツに戻って10日後、明はフランス留学に旅立ちました。南フランスでホームステイしながら6月末まで半年、現地の高校に通います。3歳から13歳の男の子3人がいる家庭で、犬と猫もいる。知らない人のうちに家族の一員として迎えてもらい、フランスの言語と文化にどっぷり浸かる生活です。私は心配しつつも、手の届かないところに行ってしまったのだから手放さなければいけないと、期間限定の子離れを実感中。ちょっと寂しいです。